

「真夏の猛特訓」

昭和40年卒 藤木 一世

私にとつての「大講堂」の思い出は、真夏のなぎなた猛特訓です。当時、「なぎなた同好会」という名で大講堂の端っこでお稽古させていたっていました。「汗タラタラ、足元ふらふら」がいつもすぐよみがえります。

2年上の畠瀬美佐子先輩の教えを受けながら、特にこの時期は畠瀬先輩のお兄さん(当時岡大医学部の学生さんで剣道紳士)が特段の稽古をつけて下さいました。つまりは異種試合の稽古。面(頭)を打たれ、足よろめき、面の中で汗が目に入つて痛くてちかちかしながら、必死についていったものです。畠瀬先輩は全国大会で個人優勝なさったほどの腕前でした。先輩のおかげで学生大会での団体優勝も経験させていただきました。先輩は今や「財団法人全日本なぎなた連盟・専務理事」として全国的、国際的にも活躍になっておられます。

そういう方と、あの暑い夏の日、あの大講堂で頑張っていたのです。本心に懐かしく、若く輝いていた思い出です。

「キラメキの季節」

昭和45年卒 池田 幸子

文化部にとつて最大の行事は、やはり「文化祭」であつたと思う。E.S.S.に所属していた私が、大講堂の舞台上に立つたのは、一年生と二年生のときの二回だつた。

生徒会と同居の部室は、常に笑いが絶えず、音楽も同居していた。文化祭で二年生が英語劇を演じるのは恒例のことらしかった。

劇後、同じ舞台上で二年生の女子六名が、先輩のギター伴奏で『金髪のジェニー』(フォスター作曲)を歌つた。勿論、英語で。それに、当時憧憬的であつたビートルズのナンバーを、先輩がギターを抱えて歌い、「イエスタデイ」は私がピアノ伴奏もさせてもらった。

二年生になり、五人で演じた英語劇のストーリーは忘れてしまつたが、練習が楽しかつたこと、メイクが可笑しかつたことは憶えている。恥ずかしさと緊張のため汗は流したけれど、舞台の上は、青春の輝きが放たれた瞬間だつたにちがいない。

楽しかつたという感覚が色褪せずに残つていますが、なんだか嬉しい。



わが心

入学式で始まる時間

背景写真/最後に全校

「母なる大講堂」

昭和55年卒 則武 透

入学直後の昭和52年4月。大講堂で生徒総会が行われた。

3年生の生徒会長をリコールすることの是非がテーマとなつた生徒総会であり、総会は荒れに荒れた。激しいヤジや、2階席からは紙ヒコーキまでが飛んで来た。新入生の私は、中学校では経験したことがない騒然とした生徒総会に出席し、チョビリ大人になつた気がした。いわば、朝日高校の洗礼の儀式だつた。生徒が自主的に行動する自由な雰囲気を持つた高校に進学したことを誇りに感じた。これが私の大講堂の原体験である。

その後、文化祭のステージ、講演会、生徒総会などが大講堂で行われた。大講堂は、体育館にはない独特の雰囲気と各種行事を包み込んでいた。

昭和55年3月。大講堂で卒業式が行われた。卒業式で君が代を斉唱することに異論のあつた私は同級生と共に、君が代斉唱を行わないように高校との交渉を続けた。結果として、君が代斉唱は実施されず、朝日高校は見事に三年間で私を自分の意見を発表することができる自主性を持った人間に育ててくれたのである。それが私の大講堂のお別れであつた。

「本当にありがとう」

平成12年卒 藤原 早夕里

ギターやドラムの爆音！
目まぐるしく変わるライトの光！！
生徒たちの歓声！！

普段、静かな大講堂が大変身するのが、朝日祭です。当時、私は生徒会での仕事で大講堂の舞台ソファという特等席から進行を見守っていました。私の鼓動が高鳴つていたのは、爆音と歓声によつて大講堂が壊れそうに心配だつたからか、ライブでの臨場感からか、大好きなセンパイが演奏していたからかは、今となつては定かではありません。大講堂は朝日高校に入学した時に、はじめて入る場所であり、その緊張感とほこり臭さともたたくさんの思い出がよみがえつてきます。「ありがとう」という言葉だけでは表現できない本心に

たくさんさんの思い出が、大講堂とともにあります。大講堂が建て替えられたとしても、高校時代をともに過ごした思い出は必ず心の中にあると信じています。大講堂、本当にありがとう！

「さらば大講堂」

三年D組 宇野 正祥

私にとつて大講堂の雰囲気とは、朝日高校の持つ空気が、すなわち「自由の伝統」が凝縮されたものであるように思われる。

周知のように、朝日高校は自由な校風を持つ学校である。しかしながら、我々の自由は無秩序で無責任な放縦とは無縁のものだ。校訓のように、自らを厳しく律し、互いに尊敬しあう賢者のみに許された「高貴な自由」こそ、我々が先輩方から継承し、そして誇り

としてきた自由の本質に他ならない。大講堂には「群賢畢至」という書が掲げられているが、大講堂に足を踏み入れるということは、この「高貴な自由」を受け継いだ「群賢」の一員となること象徴なのだと思つた。また、大講堂は先生から生徒へ、先輩から後輩へと高い志を伝える場でもあつた。大講堂で何かを語るといふことは、自らの想いや主張を伝えると同時に先輩から後輩へと伝統を継承してゆくといふ、もう一つの意義があつたと私は思うのだ。

形としての、建築としての大講堂がなくなろうとしている今、我々は大講堂が象徴していた我が校の「自由の伝統」を、いま一度思い出そうではないか。我々自身の中に、新たな大講堂を築こうではないか。我が校の光輝ある自由な精神が、いつまでも受け継がれてゆくことを私は願つて止まない。